

都市と農村住民の共創の場のあるツーリズム

～住田町の地域づくりの現状に即した効果的なツーリズムの可能性～

岩手県住田町観光協会 佐々木 康行



第1章 はじめに

第1節 研究の背景と目的

日本は人口減少、低成長時代を迎える中で、各々の地域が資源を見直し、地域の住民が一体となってイノベーションを起こす地方創生が求められている。

地方創生の重要な施策の一つとして、グリーン・ツーリズム等の都市農村交流活動が全国の農山漁村で促進されており、住田町でも民泊を通じて町民の暮らしを体験する教育旅行の取り組みや、森林資源を活かした森の案内人の取り組みなどが能動的に展開されている。

平成23年3月11日に起きた東日本大震災を契機に、被災地支援ボランティアの受入れや、企業や大学の研修の受入れなど、受動的な交流人口が増加したことで全体的な交流人口は震災前の平成22年度に比べ一時約41倍に増加し、落ち着きは取り戻したものの交流人口自体は震災前の平成22年度対比で約5倍に増えた。(図1)

しかし、住田町のアンケートによると、町のイメージとして「活気があると思わない・どちらかといえば思わない」との回答が合わせて64%となっている。(図2)

町の交流人口が増加している一方で住民は町に活気を感じることが出来ていない状況がある。筆者は町の観光協会に所属しており、町のツーリズムをコーディネートしていく立場にあるが、これらの背景を踏まえ、現在町内で行われているツーリズム等の都市農村交流活動について(1)「地域課題や住民の思いとはあまり関係の無いところで展開されているのではないかと」と(2)「農村地域に思いを寄せる都市住民の声を、地域づくりに反映させる場をつくっていないのでは」という問題意識を覚えた。

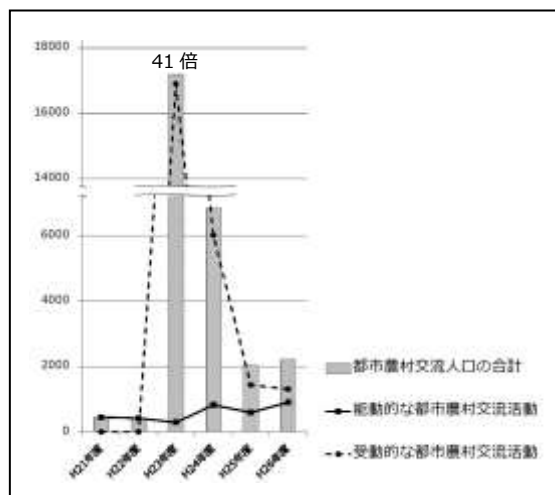


図1【住田町の交流人口の推移グラフ】

出典：筆者作成 ※平成23年度と24年度の数値の増大は、東日本大震災による支援ボランティア受入れによる数値

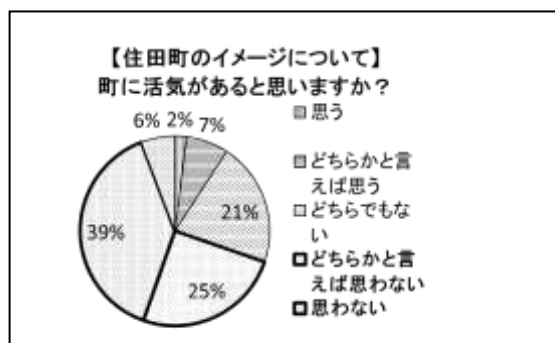


図2【町のイメージに対する町民の意識】

出典：住田町企画財政課「住田町総合計画・人口ビジョン・総合戦略」策定のためのアンケート (平成27年6月実施)

そこで、本研究では観光資源として商品化された体験旅行等による経済効果や数値目標の達成を意識したツーリズムではなく、共創の場（都市住民と農村住民が地域づくりに共に手を携える場と定義する）のあるツーリズムを対象に研究を進めることとする。

本研究では、次の2つを目的とする。

- ①共創の場のあるツーリズムの可能性についての検討
- ②住田町の地域づくりの現状に即した効果的なツーリズム導入の提案

この2つの目的を達成するために次の3点を明らかにする。

- ①地方地域と深く関わるツーリズムという新しい旅が、都市住民ニーズに合うかについて
- ②共創の場のあるツーリズムのプロセスについて
- ③ツーリズムによる能動的関係性から生まれる展開について

第2節 研究の構成

本レポートは5章構成とし、研究の方法のフローは図3のとおりである。

第1章で背景と目的、研究の構成と調査の方法について述べ、第2章において「地方地域と深く関わるツーリズムという新しい旅が、都市住民ニーズに合うかについて」を調査し、第3章において前章で調査した結果を踏まえて「ツーリズムに共創の場を導入することにより農村と都市の住民が能動的な関係性をつくれるかについて」を実地調査し、第4章では「先進地域の取り組みプロセスと第3章の調査地域の取り組みを比較し、今後の方向性について検討」を行うことで、最後の第5章のまとめにおいて、今後の住田町の地域づくりで取り組むツーリズムの方向性を導く。

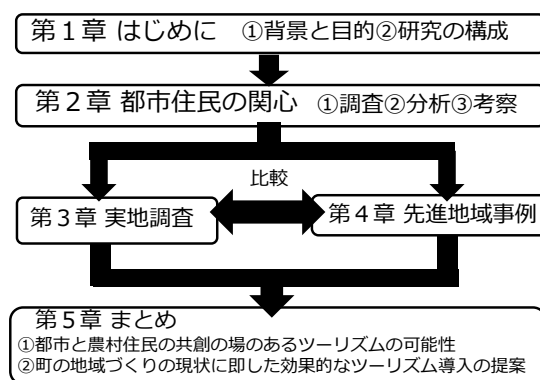


図3【研究のフロー図】

調査の流れについては図4のとおりである。

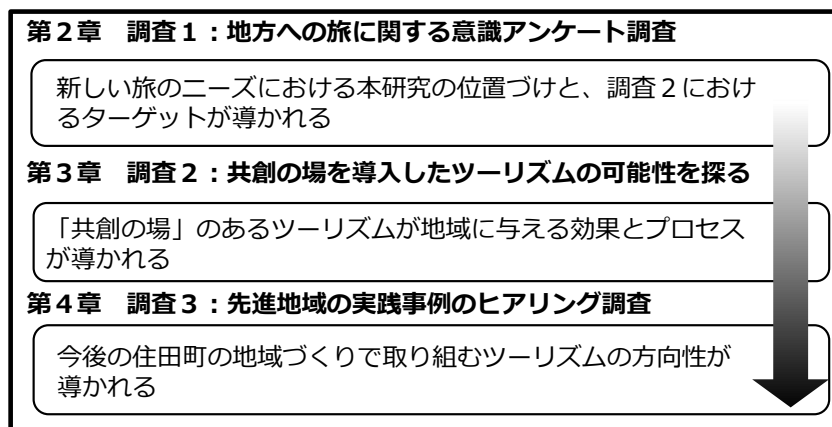


図4【調査方法のフロー図】

第2章 地域と深く関わるツーリズムへの都市住民の関心

第1節 調査の内容

地域と深く関わるツーリズムへの都市住民の関心度を探るために、東京都心部の有楽町駅前での街頭アンケート（平成27年11月9日～11日の3日間）と、住田町観光協会に関連するインターネットサイト、ブログやSNS（Facebook）を活用しアンケート（平成27年11月5日～7日の3日間）を行った。アンケートの調査内容と結果は次のとおりである。

街頭アンケートの回答者数は52人（全体の46%）、インターネット・SNS等の回答者数は60人（全体の54%）で合わせて112人となり、回答した性別比率は男性が44%、女性が56%であった。（図5）

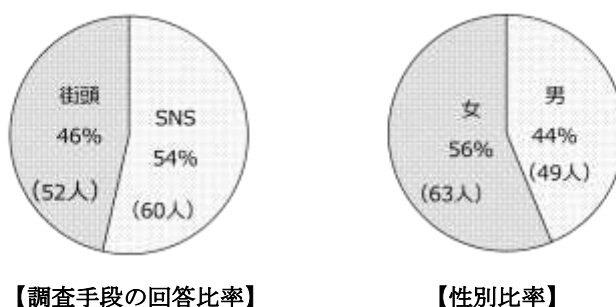


図5 「地方への旅についての意識アンケート調査」より「調査手段の回答比率と性別比率」について
出典：筆者作成

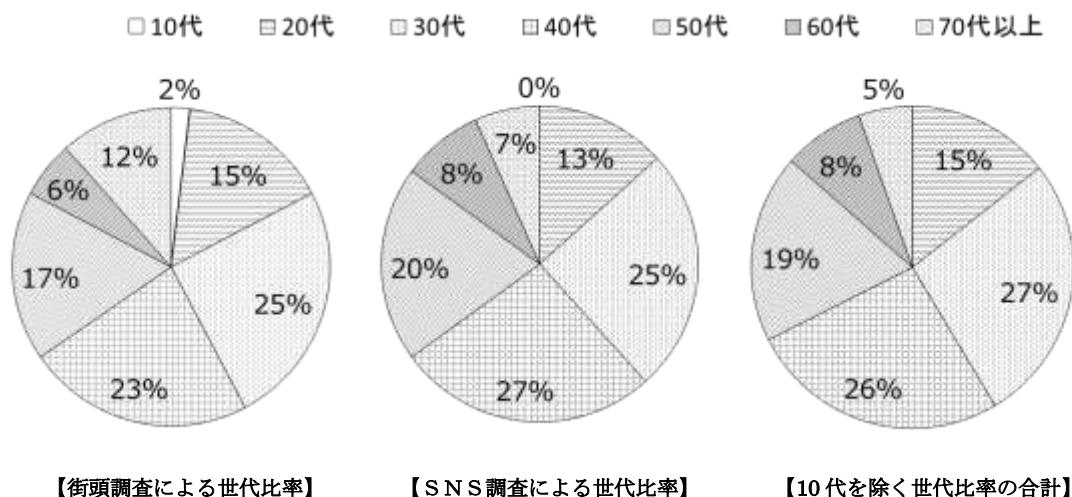


図6 「地方への旅についての意識アンケート調査」より「世代の比率」について
出典：筆者作成

回答した世代比率においては、街頭調査で10代が1名のみ回答し、SNSでは回答が無かったため、今回の調査では対象外とした。合計の世代比は20代が15%、30代が27%、40代が26%、50代が19%、60代が8%、70代以上が5%となった。（図6）

第2節 調査結果の分析

まず旅先のリピート率について問う設問の調査結果について述べたい。

「同じ地域を訪れることはありますか」という設問に対し、全体で75%が「ある」と答え、30代～60代までの世代は90%以上が「ある」と回答している。(図7)

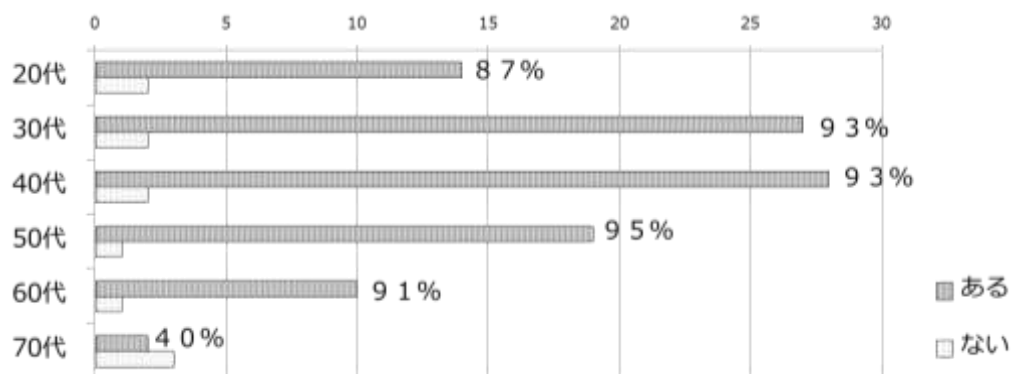


図7 「地方への旅についての意識アンケート調査」より「旅先のリピート率」について
出典:筆者作成

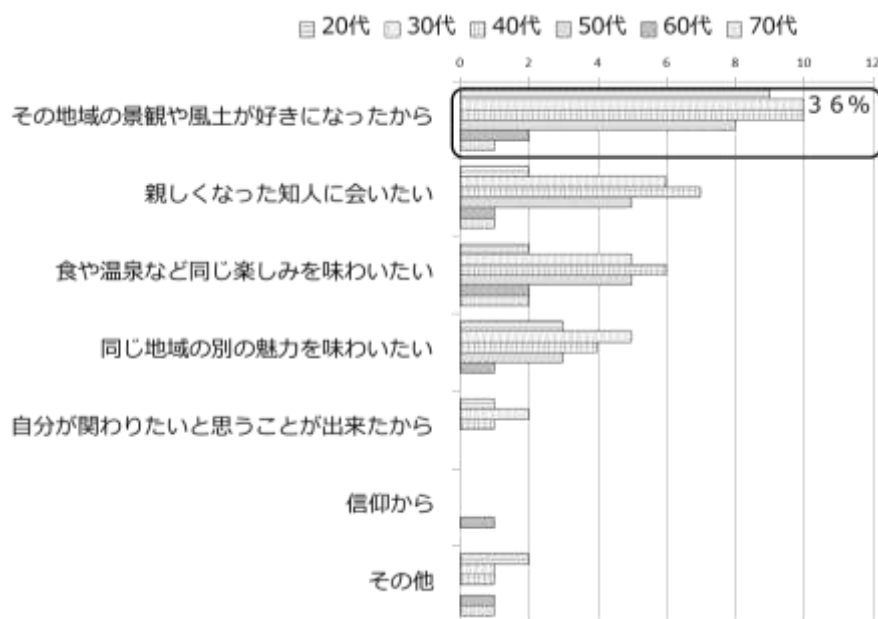


図8 「地方への旅についての意識アンケート調査」より「旅先のリピート理由」について
出典:筆者作成

その理由について問う設問「一度訪問した地域を再び訪れたいと思う理由は何ですか」においては、「その地域の景観や風土が好きになったから」が36%と最も多い。(図8)

次に地方への新しい旅の目的の関心について、設問「地方への新しい旅の目的として関心があるものを選び○を付けてください(複数回答可)」における選択肢の中では「自然や交流を楽しむツーリズム」への関心度が一番高く21%となっている。(図9)

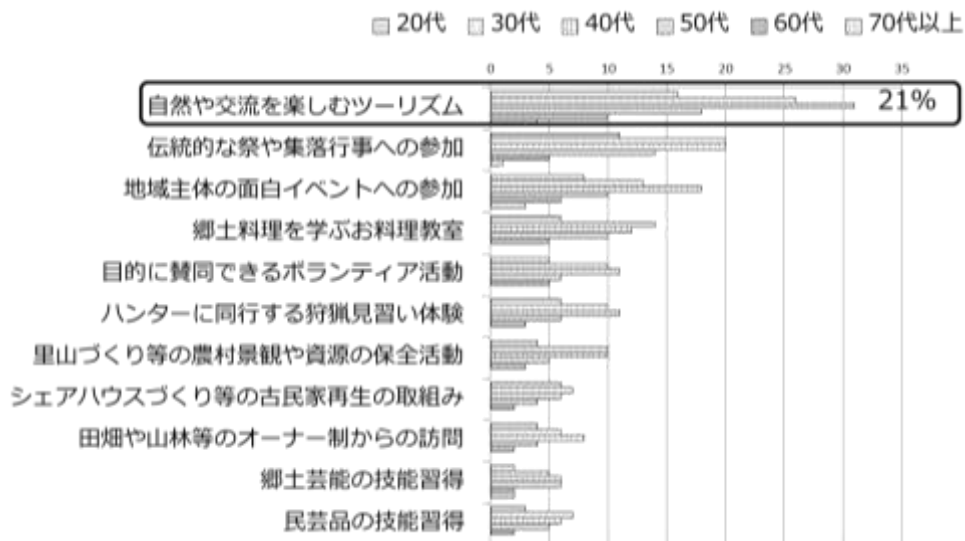


図9 「地方への旅についての意識アンケート調査」より「新しい旅の目的」について

出典：筆者作成

第3節 調査結果の考察

アンケート分析の結果をまとめると、その地域の景観や風土を好きになると30代～60代までの世代の90%以上が同じ旅先をリピートする傾向がある。また、自然や交流を楽しむツーリズムが地方への新しい旅のニーズとして関心が高いようだ。

では、そのようなニーズに合わせたツーリズムを企画する際に、共創の場を導入して実施した場合、地域の活性化は見られるだろうか。また、参加者と農村住民の間にはどのような関係性が生まれ、どのような変化があるのだろうか。

これらのことを検証するために、次の章では共創の場を導入したツーリズムの可能性を探る実証実験を行いたい。

第3章 共創の場を導入したツーリズムの可能性を探る実地調査

第1節 調査の内容

実地調査の対象は、住田町上有住地区坂本集落の西野水車組合の皆さんと有志集落住民に受入れを協力していただき、このツーリズムの企画を実施することとした。

実地調査に協力いただく西野水車組合は平成19年から活動を始め、会員数は16人である。「集落の生活文化の保全伝承」「地域内の親睦交流」を主な目的とし、集落生活文化の再生や伝承活動に取り組んでいる。近年103世帯の坂本集落の高齢化率は39.87%（平成27年4月1日現在）と進み、担い手不足もあって先を見通した活動が出来ない状況となっている。

平成27年11月14日～15日の1泊2日の日程で企画し、住田町を一度訪問したことがある市民大学（丸の内朝大学）のコミュニティ約120名を対象に募集したところ、50代男性1名

と 60 代女性 1 名の計 2 名が参加した。集落側の参加は 12 名で、4 歳～90 歳の幅広い世代が参加したが、20 代～40 代の参加はなく、50 代～70 代の参加が主だった。今回の実験においての経費は、参加費として徴収した 10,000 円（内訳：宿泊費 6,000 円、交流会費 2,000 円、昼食代 1,000 円、入浴料 600 円、保険料 400 円）であり、ガイド料や送迎にかかる燃料代は含まれていない。



【写真 1 西野水車組合の皆さん】
出典：西野水車組合

なお、ツーリズムの内容は、表 1 のとおりである。

表 1 【共創の場を導入したツーリズムの内容と日程】 出典：筆者作成

日にち	時間	内容	備考
11月14日	10:30	新花巻駅参加者集合	案内人との時間調整 水車組合のご婦人 集落側参加者12名 村上氏進行
	11:30	昼食	
	13:00	住田町内の資源確認(めがね橋・ツキノキ淵)	
	14:00	坂本集落案内人 村上氏と合流 坂本集落の地域資源点検(別当大滝～古民家 御下(オスモ)～湧水～炭焼窯～水車小屋)	
	16:00	交流会準備(キビ団子づくり体験～交流会)	
	18:00	自己紹介および参加者からの一日の感想 地域づくりにおける都市住民との共創の場	
	20:00	解散 後片付け	
11月15日	9:00	参加者よりヒアリング	
	10:30	ヒアリング終了	
	11:00	大祝沢～大祝岩窟を目指しトレッキング	
	12:00	大祝岩窟にて昼食	
	16:00	参加者 新花巻駅にて解散	

現地では、西野水車組合の事務局立場の村上薫氏に坂本集落を案内してもらい、集落資源を見学した後、交流会の準備にてキビ団子づくり等の郷土料理の体験を行い、交流会では自己紹介と参加者からの感想や意見を聞いた後、相互に語り合う共創の場を設けた。

共創の場では、村上氏の進行のもと、参加した全員から地域づくりについての意見やこの場の感想を出して話し合った。またこの実地調査において、企画の前後に都市と集落の住民どちらにもヒアリングを行い、都市住民からはレポートを提出してもらい、表 2 に整理した。

表2【共創の村づくりフィールドワークのヒアリング結果比較分析】出典：筆者作成

	都市住民側の意識	共通価値意識	坂本集落住民側の意識
実験前の意識	<ul style="list-style-type: none"> ・地域をじっくり見たい ・地域の楽しみを味わいたい ・地域の価値を気づかせたい 		<ul style="list-style-type: none"> ・どこの誰が来るか不安 ・おもてなしへの不安 ・よそ者との交流に疑念
実験後の意識	<ul style="list-style-type: none"> ・大婆ちゃんのお話をじっくり聞きたい ・畑や味噌を一緒に作りたい ・より深く関わりたい ・羨ましい 	<ul style="list-style-type: none"> ・異なる生活文化を持つ人との交流は楽しい (集落側)古民家を再生し交流の拠点としたい(都市側)古民家再生に関わりたい ・高齢者もつ生活文化が貴重で後世に残していきたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ人にまた来て欲しい ・色々体験できるタイミング良い時に来てほしい。 ・交流と人が集まることは楽しみ
長期的視点で見たモノ	<ul style="list-style-type: none"> ・集落のファンを創造する取組をしてみたい ・楽しい村の未来を描いて我々を巻き込んでほしい ・田畑のオーナー制はどうか 	<ul style="list-style-type: none"> ・集落の取組スケジュール情報の共有 ・交流活動における仕組みづくりが必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・地元で30代～40代の担い手が地域に必要 ・山村留学の取組みとか面白そう ・ありのままの集落の暮らしへの感謝
短期的視点で見たモノ	<ul style="list-style-type: none"> ・集落出身で都市在住の子や親戚、その知人や友人との交流から始めては ・長期滞在は、仕事をしている場合は厳しい 		<ul style="list-style-type: none"> ・まずは自分達が先人達からの生活文化を身に着けたい ・滞在させる場所がない ・一度に大人数の受入れは厳しい ・先が見えない
経済的視点で見たモノ	<ul style="list-style-type: none"> ・頻繁に訪れる場合は交通費が負担 		<ul style="list-style-type: none"> ・古民家再生に関わる資金
地域資源の捉え方	<ul style="list-style-type: none"> ・魅力にしか映らない 		<ul style="list-style-type: none"> ・時間制限と人不足による重圧

第2節 調査結果の検証と分析

実地調査において都市住民と集落住民から収集したヒアリング内容と、都市住民から提出していただいたレポートの内容を整理した表をまとめ、都市住民と集落住民の実験前の意識と実験後の意識変化をそれぞれ比較した。(図10「実験前の意識」、図11「実験後の意識」)

実験前の意識状態を表す図10によると、都市住民側の意識は、限られた情報からの集落への興味と、漠然としたイメージや思い込みが見られるものの、ややプラス思考である。一方で坂本集落住民の意識は、不安感と期待感と戸惑いが見られ、ややマイナス思考である。

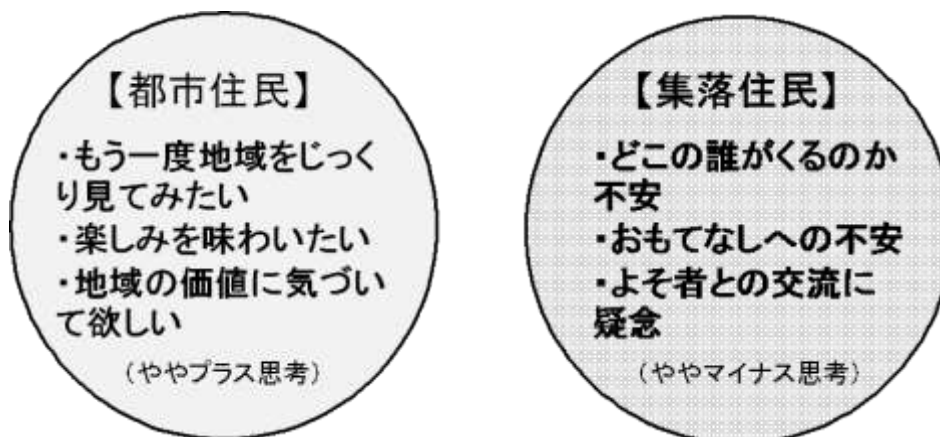


図10【共創の村づくりフィールドワークのヒアリング結果比較分析】
実験前の意識についての図 出典：筆者作成

実験後の意識状態を表す図 1 1 によると、都市住民側の意識にも農村住民側の意識にも能動的な意志が見られたほか、双方に別々の気づきがあった。また、共有認識としては、地域の課題や交流の課題が情報共有され、地域の課題を都市住民も自分事として捉え、新たな共通の夢とつながりも生まれていた。

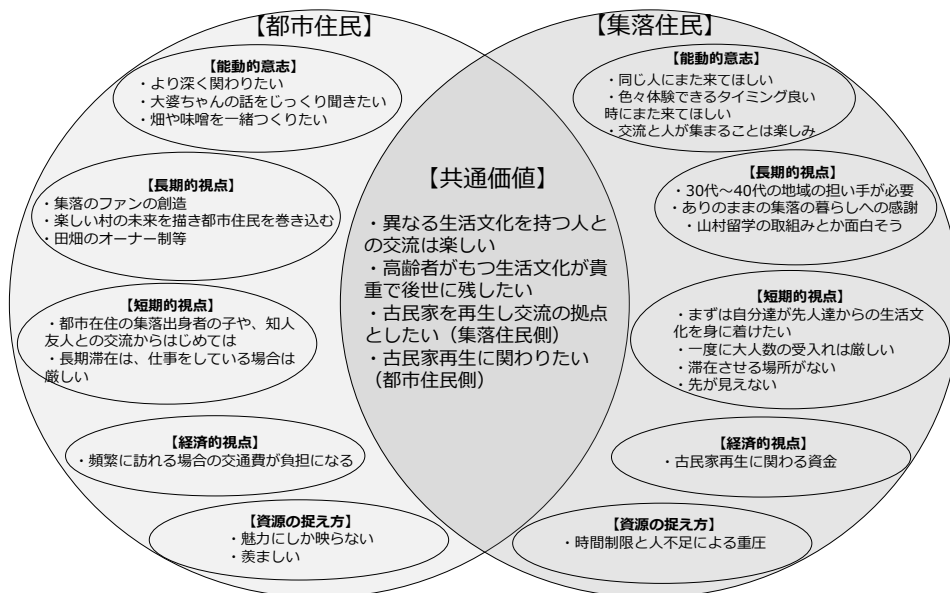


図 1 1 【共創の村づくりフィールドワークのヒアリング結果比較分析】
実験後の意識についての図 出典：筆者作成

第 3 節 調査結果の考察

この実験における変化のプロセスについて、時間経過を横軸とし、心境の変化を縦軸とした図にまとめた。(図 1 2)

実験前は、集落住民がややマイナス思考だったのが、実験後は相互に気づきと共通の夢を抱きプラス思考に転じていた。この変化のプロセスは次のとおりである。

導入の 2 時間で参加者が村上氏と集落資源を見て魅力や課題を捉え、その後の 2 時間の郷土料理づくり体験と交流会の準備による共同作業の間に他集落民と参加者に親近感が湧く。共創の場の 2 時間の中で、双方の自己紹介と再度「地域課題と魅力の確認」や「一緒に取り組んでみたいこと」についての意見交換を行う。その際、90 歳の大家のお婆さんが「ただただ、いづものように、こごで生きで行けるごどが、何よりありがでやあごどでがんす」という集落のありのままの暮らしへの感謝の言葉と、「こうして皆様方が来てで、人っこ集まるのは面白しええごどです。」という交流と人が集まることの楽しみについて触れたことで、その場に参加した人々が同じ時間の共有に価値を感じたと同時に、行動や関係性構築への意欲が湧き、前向きな思考に転じるという流れがあった。「集落の暮らしに感謝しながら生きる人の魅力」と、「その価値を知る人々との楽しい時間の共有」に鍵が隠されていたようだ。

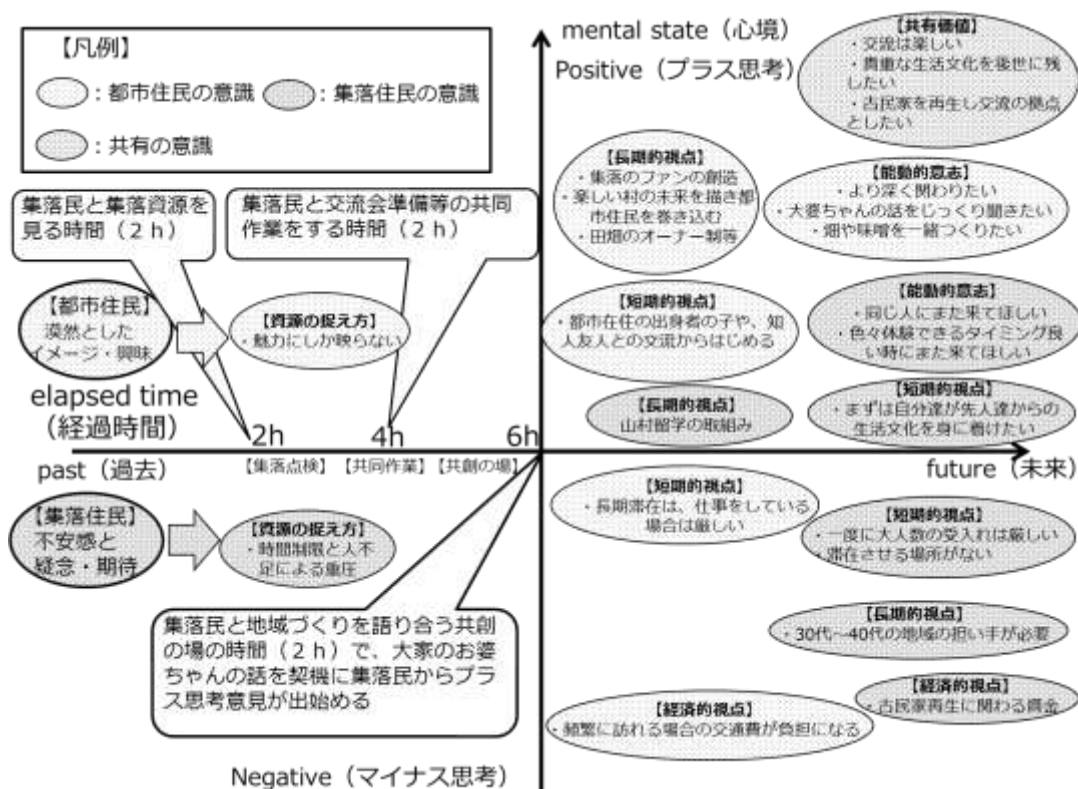


図12 【ツーリズムコミュニケーションプロセス図】 出典：筆者作成

以上が、共創の場を導入したツーリズムにおける能動的関係性構築のプロセスの考察である。では、先進地域ではどのように展開しているのか。次の章では今後の展開について考察するために、先進地域事例と比較してみたい。

第4章 先進地域の実践事例との比較

第1節 先進地域の概要と取組み内容

里山クラブやかまし村（以下、やかまし村）は、岩手県遠野市宮代集落にある。53戸の宮代集落の住民を中心に「自分たちが楽しめることを発案実行して、明るい未来を拓きたい」「異なった生活圏や文化が交流し、互いに影響を与え合うことで新たな発見や知識・技術の移転により活性化したい」という目的で平成20年に設立されたコミュニティである。同クラブ設立以前からツーリズムを通じて都市住民と共に村の未来を創る活動に取り組み、設立後



【写真2 ツーリズムによる交流】
 出典：やかまし村 Facebook ページより

には、いわての元気なコミュニティ100選にも選ばれ、あしたのまち・くらしづくり活動賞における受賞経歴もあるグリーン・ツーリズムによる地域づくり先進地である。

やかまし村の特徴は、「①多様なステークホルダーの数と質」「②自主財源を生み出す工夫」「③都市住民との共創による地域づくり活動」である。

内部ステークホルダーとなる市やNPO団体、企業等が7つ、外部ステークホルダーとなる大学、NPO団体、自治会、ツーリズム関連団体等が10つとチャンネルが多い。また、集落の会員のほか、土木業、翻訳家、医者、魚屋、大学教授など様々な顔ぶれのビジター村民（集落外の会員）が200人を超え、多様性に富む緩やかなつながりがこのコミュニティの特徴となっている。このコミュニティ設立は、もともとは集落で取り組む首都圏の大学生の受入れ活動から始まり、その後集落住民の有志が中心となって立ち上げたことが契機となっている。

自主財源となる主な運営資金については、村民の会費と有志村民による解体作業請負のアルバイトで得た資金、および「カップ」（写真3）という地域通貨（1カップ=1円）を活用している。この地域通貨は、はじめにビジターに購入させて交流活動をするほか、農家にとって有用な労働提供があった場合のお礼として地域通貨をビジターに渡している。また、この地域通貨を通じて集落の農産物を参加者に購入してもらうことが出来るほか、再訪する際に再び使うことができるなど地域通貨をコミュニケーションツールとして活用している。



【写真3 地域通貨「カップ」】
出典：やかまし村ホームページより

都市住民との共創活動においては、内外のステークホルダーを通じて来村したビジターと、やかまし窯というピザ窯を通じた体験交流の中で、地域づくりや都市住民が農村で実現してみたい夢を語り合って意気投合し、その夢の実現をやかまし村の敷地で展開し共同作業することで、関係性の強いビジター村民を獲得している。

第2節においては、実地調査を行った坂本集落の西野水車組合と活動の比較分析してみたい。

第2節 実地調査地との比較分析

比較因子は5年間の平均値「活動の回数」「情報発信の回数」「交流者数」（図13）、「外的ステークホルダーの数」「内的ステークホルダーの数」と定量的比較分析（図14）、「活動資金の性質の比較図」（図15）、「ステークホルダーマップ比較図」（図16）をもとに分析する。

まず定量的比較分析だが、活動回数においては西野水車組合もやかまし村も年間平均15回と同じであるのに対し、情報発信の回数は約12倍、地域外交流者数は約48倍もの差がある。（情報発信の回数については、やかまし村のホームページの更新数と、フェイスブックの記事数をもとに平均数を算出。西野水車組合はホームページが無いので、組合員の個人のフェイスブックページの関連記事数と上有住地区計画推進協議会のホームページの記事数をもとに算出している）。また、内的ステークホルダーについての数は2倍程度の差だが、外的ステークホルダーは西野水車組合には無い。

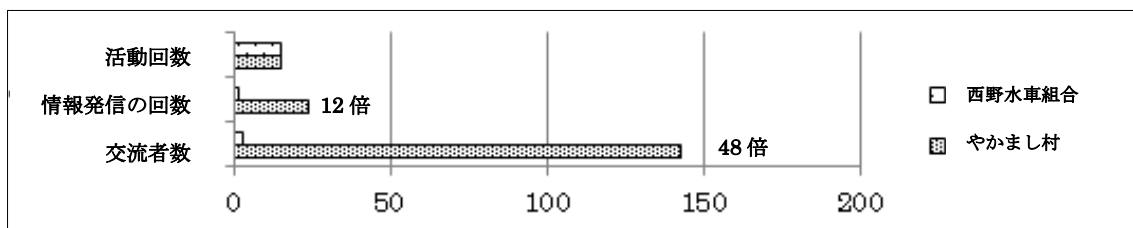


図13 【活動データ比較グラフ】(平成22年～平成26年の5年間の平均値)

出典：筆者作成

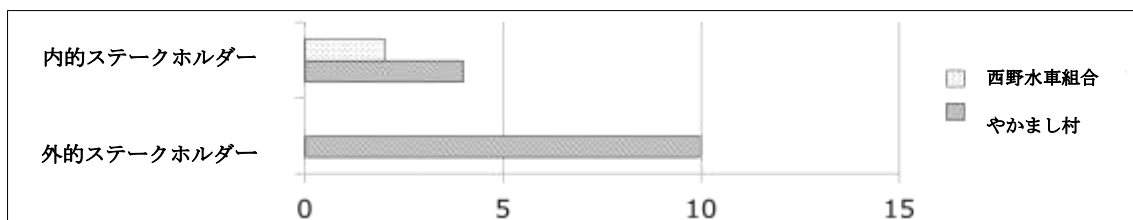


図14 【ステークホルダー比較グラフ】 出典：筆者作成

次に、活動資金の性質と、ステークホルダーの数と質について見てみたい。

ハード事業については、西野水車組合は組合費や寄付金にて賄われているのに対し、やかまし村では会費と有志村民による空き家の解体作業の請負による資金や資材調達など、能動的に自主財源を獲得する工夫が見られる。また、ソフト事業では、西野水車組合は、補助金を農地の保全活動に活用しているのに対し、やかまし村では補助金を一時的な交流活動にのみ活用している。この他やかまし村では、通常の交流活動で地域通貨をコミュニケーションツールとして活用している。(図15)

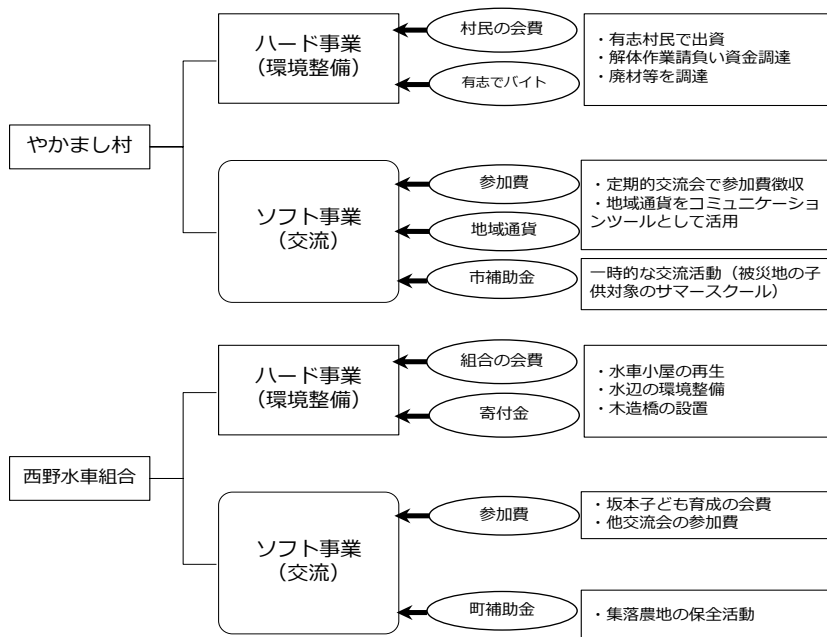


図15 【活動資金の性質についての比較図】
出典：筆者作成

ステークホルダーの数と質については、やかまし村は内的ステークホルダーのほかに外的ステークホルダーも多くあるが、内的ステークホルダーにツーリズムや都市農村交流に取り組むステークホルダーがあり、その窓口を通じてさらに外部ステークホルダーを増やしており、地域内外との協働解決型の取り組みを展開している。一方、西野水車組合には外的ステークホルダーは無く、内的ステークホルダーについても外的ステークホルダーを繋ぐ役割はないため、基本的に地域内で自己解決型の取り組みを展開している。(図16)

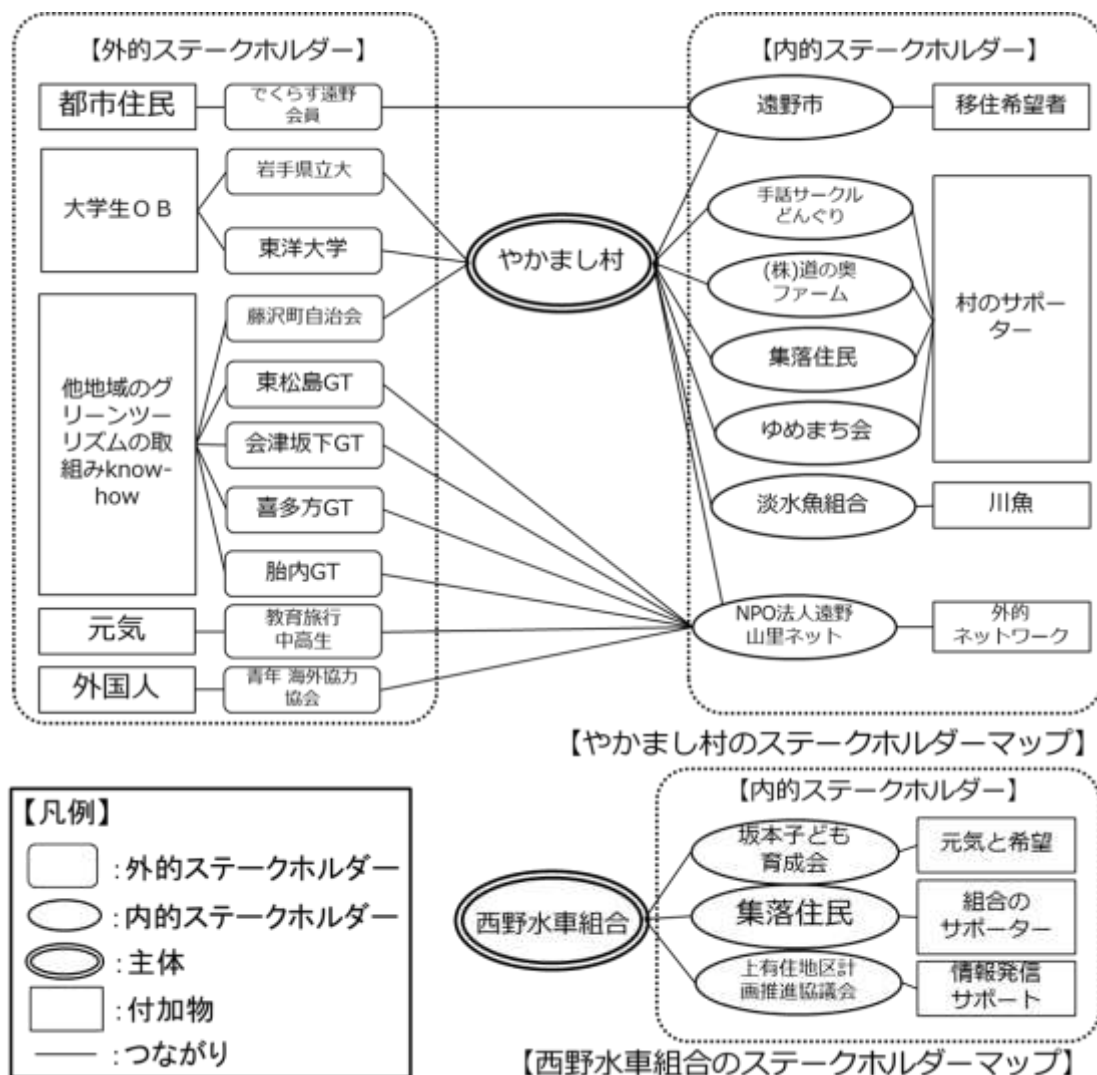


図16 【ステークホルダーマップ比較図】 出典：筆者作成

第3節 分析結果からの考察

第2節においてグラフとステークホルダーマップを用いて比較分析したとおり、やかまし村は、地域外と接点を持ちやすい内的ステークホルダーと連携することで、新たな外的ステークホルダーを獲得し、その交流の中でアイディアや新村民など多くの収穫を得ている。

また、取り組みにおいて経済的観点からの交流人口の数値目標の達成ではなく、あくまでも地域づくりにおける人の関係性の構築による交流人口を増やすことで、持続発展的な地域づくりを達成している。

第5章 まとめと提案

第1節 共創の場のあるツーリズムの可能性

今回の研究によって明らかになったことは、次の3つである。

- ①その地域の風土に好意を抱いた都市住民は、同じ地域を再び訪れる可能性が高く、地方への旅における新しい目的となるのは、地域と深く関わる交流のあるツーリズムである。
- ②その交流の中に「共創の場」があり、ありのままの暮らしの価値を知る人々との深い交流から思いが共有化され、新たな気づきや能動的な関係性が生まれるという活性化が見られ、地域集落の持続につながる可能性がある。
- ③ツーリズムを通じた多様なステークホルダーをもつことと、補助金に頼らず工夫ある自主財源を活用することで、自由に創造性ある地域づくりの取り組みを展開することができる。

第2節 住田町の地域づくりの現状に即した効果的なツーリズム導入の提案

住田町の交流人口が増えている一方で、活性化を感じることが出来ていない背景には、少子高齢化、過疎化による地域集落の課題があり、その課題とは「地域の誇りの喪失」に対する危機感である。この危機意識がある現状を踏まえ、我々は今後の都市農村交流と観光の在り方を考えていかなければならない。それでは、今後どのようなツーリズムを展開することが住田町の地域づくりに効果的なのかを、西野水車組合をモデルに具体的に提案したい。

西野水車組合では、今まで地域内のつながりを活用した自己解決型の取り組みを展開してきたが、今後は地域内外のつながりを活用した協働解決型の取り組みに転換していく必要がある。

受入れ体制としては、内的ステークホルダー（住田町、住田町観光協会、上有住地区計画推進協議会）と連携し、企画づくりや情報発信に協力してもらい、丸の内朝大学のコミュニティに情報発信を行うのも良い。

受入れ準備としては、まず集落の農事歴を作成し、サポート内容を具体的に想定して内外のステークホルダーを通じて情報発信を行い、参加者を募る。その際、交流に関わる必要経費の積算、必要物品の準備や役割分担、作業の段取りなどを事前に話し合っておく必要がある。また、都市部コミュニティへの情報発信については最低でも3ヶ月前に企画が告知されていることが望ましく、タカキビ播種作業に合わせて企画を行うのであれば2月～3月には情報を発信する。

相互に対等な関係性と継続的な取り組みが展開できるよう、参加者からは用途明確な参加費を徴収し、作業の対価として地元の農産物等の返礼を検討しておくことで参加者の交通費の負担感を緩和できるのではないだろうか。また、滞在箇所については公民館や集会所を拠点とし、入浴については集落内の民家に協力してもらるか、地域外の入浴施設を利用するか検討してお

かなければならない。

内容についても、おもてなしの体験ではなく、集落の維持に実質的に必要な作業を体験として提供し、その中で集落の生きた知恵を伝える場面がある方が、お互いにより有益な時間となる。また、慰労の場面となる交流会においては、地域づくりについての夢を語り合う共創の場を設けることで、新しい発想と展開、つながりが生まれてくる可能性がある。

このように取り組みにおける様々な課題や検討点はあるが、集落課題や活動団体の実情に即したツーリズムを展開することで、都市と農村住民の相互に恩恵のある対等で能動的な関係を構築できるのではないだろうか。また、我が町の地域づくりにおけるツーリズムは、経済効果や数値目標の達成を意識した「一儲け」のツーリズムではなく、あくまでも人と人との深い関係性を増やしていく「人儲け」のツーリズムが地域の誇りを守り育てることにつながっていくのではないだろうか。

【おわりに】

最後に、後藤先生をはじめこの全国地域リーダー養成塾でお世話になった先生方や、事務局の皆様方、共に学んできた塾生の皆様方、西野水車組合の皆様方、里山クラブやかまし村の皆様方、家族、そして当塾に派遣していただいた本町の皆様方に心から感謝を申し上げます。

(参考文献、資料他)

- 大森彌、武藤博己、後藤春彦、大杉寛、沼尾波子、関司直也共(著)『人口減少時代の地域づくり読本』:公職研(2015)
三田愛(著)『とりまーかし』:「地域コ・クリエーション研究」:じゃらんリサーチセンター(2014)
青木辰司(著)『転換するグリーン・ツーリズム』:学芸出版社(2010)
松井豊(編著)『対人心理学の視点』:ブレン出版(2002)
吉田謙太郎 樋口めぐみ(著)『ファームイン全国調査によるグリーン・ツーリズムの計量分析(1999)』
早稲田大学商学部 井上達彦ゼミナール8期 大北はるか 水野萌(著)『エンターテイメント産業における価値共創のプロセス(2012)』
勝又壮太郎(著)『顧客の心をつなぎとめる『信頼』と『コミットメント』(2010)』
岡山商科大学経営学部 商学科 講師 大石貴之(著)『農村地域におけるグリーン・ツーリズムの課題(2014)』
井上久光(著)『観光ビジネスにおけるリレーションシップ・マーケティング(2003)』
井上淳子 富田健司(著)『医療連携によるリレーションシップ・マーケティング(1991)』
日高優一郎(山梨学院大学) 水越康介(首都大学東京)(著)『社会的企業家を捉える論理 関係性概念にもとづく公共・非営利マーケティングの再検討(2015)』
神谷洋次郎 井上哲浩(著)『リレーションシップの形成と発達:多次元コミットメントモデルによる医師-RM間の分析(2013)』
財団法人都市農山漁村交流活性化機構(著)『都市住民のグリーン・ツーリズム行動を活性化させる新たな手法の調査研究(2007)』
愛知大学法文学部人文学科 観光まちづくりコース准教授 井口梓(著)『地域づくりと風土をめぐるツーリズムの可能性(2013)』
環境省 大雪山国立公園エコツーリズム基盤整備基本計画策定業務報告書(2011)
森 信之(著)『地域振興におけるツーリズム ツーリズム計画に関わる視点(2002)』
日本建築学会 農村計画委員会 都市計画委員会『農山村地域と大学の共創まちづくり・むらづくり』資料(2009)
観光論考 新たなツーリズムの動き「参加型観光」の可能性
<http://www.espacemuse.com/Pages/tourismespacemuse2.aspx>
日本交通公社:先読み!マーケット 第二十四話 オピニオンリーダー層に聞く2014年の国内旅行動向
<https://www.jtb.or.jp/report/market-forecast-2014>
里山クラブやかまし村ホームページ
<http://www.yakamashimura.com/>
里山クラブやかまし村 Facebook
<https://www.facebook.com/yakamasu/?fref=ts>
遠野市ホームページ
<http://www.city.tono.iwate.jp/>
上有住地区計画推進協議会ホームページ
<http://www.kamiarisu.org/>